

eラーニングでの連携授業で 家庭学習への意欲を高める

福島県 南会津町立檜沢中学校

南会津町立檜沢中学校は、近隣の五つの中学校と共にインターネットを活用した「ライブ授業」を全学年で行っている。チャットでやりとりをしながら他校の生徒と同時に同じ授業を受けることで競争意識が高まり、家庭学習への意欲が高まったという。

学校と生徒の様子、課題

部活動で見られる負けん気をいかに学習に向けるかを追究

福島県の西南部に位置する檜沢中学校は、全校生徒52人の単学級校だ。地域では少子化や過疎化の影響で学校の統廃合が進み、複式学級を有する学校や単学級校が増えている。ほとんどの教科で担当教師は1人という学校も多く、校内で教科研修を深めることが難しいことも課題だった。

同校は、生徒同士の学び合いや友だちと意見を述べ合う活動に力を入れてきた。ところが、元々おとなしい性格の生徒が多く、授業

中の発言に消極的な傾向がなかなか変わらなかった。また、幼い頃から人間関係が固定されていることもあり、友だちに対して競争意識をあまり持たないという。渡部早苗校長は、そうした生徒の意識を次のように説明する。

「生徒にとってクラスメートは幼なじみであり、家族のような存在です。『あの子は自分より成績が良くて当たり前だ』などと捉えているため、もっと勉強して友だちに追いつこうという意識が弱いようです。その上、地域には、学習塾など他校生の成績から刺激を受ける場もほとんどありません」

一方、部活動は盛んで、ソフトボール部や剣道部は県大会・東北大会の出場実績がある。

School Data

◎1947（昭和22）年開校。2006年度から南会津郡の小規模校5校と共に「ライブ授業」や合同の学習コンテストなど、生徒の競争意識を刺激し、学習意欲につなげる活動に取り組んでいる。



校長◎渡部早苗先生

生徒数◎52人 学級数◎3学級

所在地◎〒967-0023

福島県南会津郡南会津町福米沢字大田1340-1

TEL◎0241-62-0026

URL◎<http://www.hisawa-j.fks.ed.jp/>

「部活動では他校生と競い合う機会が多く、熱心に練習に打ち込んでいます。そうした生徒たちを見て、他校生と共に学ぶ環境があれば、向上心が高まり、学習意欲の向上につながる」と考え、それを実践できるeラーニングによる他校との学び合いに関心をもちました」（渡部校長）

取り組みのポイント

◎eラーニングの活用
他校との競争意識が生徒を学習に向かわせる

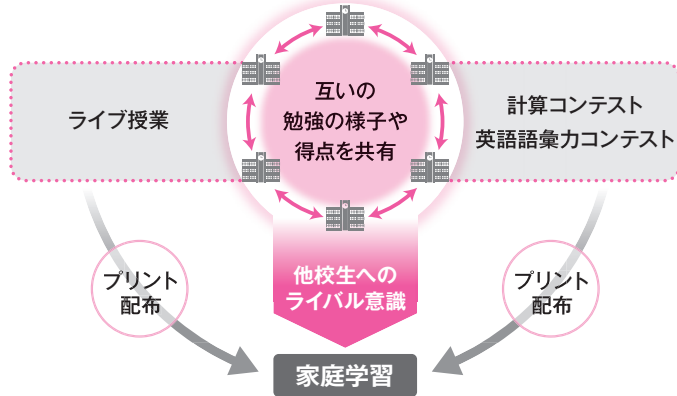
2006年度、福島県教育委員会は、檜沢

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

小規模校6校が連携する「学習サポート事業」



ライバル意識を育み 家庭学習につなげる

◎地域の小規模校6校が連携し、2校1組で受講する「ライブ授業」と6校合同で実施する学習コンテストに取り組む。自校内では友だちに対してライバル意識をあまり持たない小規模校の生徒が、他校生と共に学習することで大きな集団の中で向上心が高まり、更に互いの学習意欲を高めていく。「ライブ授業」の内容やコンテストの練習問題はプリントにして事前に配布し、家庭学習を促している。

中学校を含む南会津地域内六つの単学級中学校で「地域を担う人材育成のための学習サポート事業」（以下、「学習サポート事業」）を導入した。各校のコンピュータ教室でeラーニングを実施すると共に、通信添削教材を配布して宿題などに利用しようという取り組みだ。eラーニングの特徴を活用し、生徒の学習意欲向上と学習習慣を確立することをねらいとしている。

eラーニングでは、民間の外部講師による講義を配信する「ライブ授業」（P.28図1）を実施している。2校が1組となり、同時に受講する。教科は英語と数学で、どの学年も各教科年12回、学校選択の授業として行う。「ライブ授業」は約30分で、残り20分は各校の教師が授業を行う。

「ライブ授業」の内容は既習範囲の復習が中心で、問題演習を5問程度解き、その解説を聞く。生徒が1問ずつ考える時間を設け、生徒は解答を講師にチャットで送る。生徒の解答は講師にしか分からない仕組みであり、講師は受講者全員の解答を確認してから解説をし、正解者の名前を発表する。

「生徒は自分の名前が呼ばれればうれしいですし、呼ばれなければ『もっと頑張ろう』と思うようです。もちろん他校生の名前も読み上げられるため、共に学んでいるという実感が高まります」（渡部校長）

授業内容や時間配分は6校の教科担当があ



南会津町立檜沢中学校
小林伸明 Kobayashi Nobuyuki
教務主任、数学科担当。「服装や挨拶など日常生活すべてにおいて生徒の模範となる教師でありたい」



南会津町立檜沢中学校校長
渡部早苗 Watanabe Sanae
「自分のしっかりとした考えと他者への思いやりを持った生徒を育てたい」

らかじめ話し合って決め、外部講師に伝える。外部講師ではなく、生徒の日常を最もよく把握している教師が授業内容や時間配分を決めた方が、生徒により適した授業が出来る考えたためだ。「ライブ授業」1回ごとに、前年度に実施した同単元の「ライブ授業」の改善点を6校で出し合い、その年度の幹事校がまとめて講師側に伝える。各校との連絡は電話やファクスが基本だが、年4回程度、教科担当が集まって話し合う機会を設けている。

「他校の教師と意見を交換することで、他校の教え方の工夫、授業進度、生徒の反応などを知ることが出来ます。それを基に自分の授業を振り返れば、指導力向上にもつながります」（渡部校長）

「ライブ授業」で扱う問題はプリントにして授業前に生徒に配布し、家で解いてくるように指導している。30分という短い講義で効果的に学ばせるためだ。数学科の小林伸明先生は、「ライブ授業」と家庭学習のつながり

ライブ授業（30分）

① 講師と挨拶する（約1分）

「ライブ授業」冒頭、「こんにちは。よろしくお願ひします」と、生徒がチャットで講師と挨拶を交わす。挨拶に使われる「みんなでチャット」は互いに内容を確認できるが、解答に使われる「こっそりチャット」は講師しか見られない

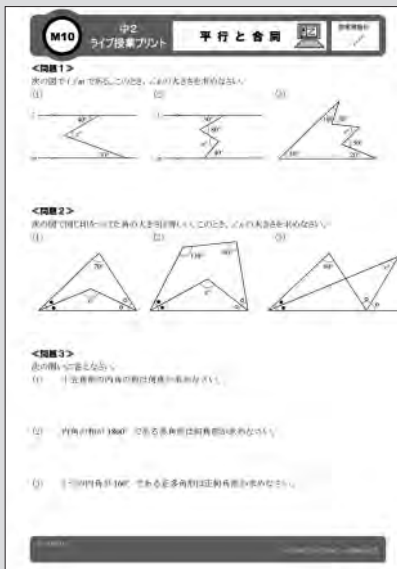


② 生徒が自力で考える時間（各3～5分）

1問ごとに考える時間を設けている。大半の生徒は事前に配られたプリントに家で解いてきているが、分からなかった問題は「ライブ授業」中に改めて取り組む。教科担当の教師が机間指導をしながら解き方をアドバイスする



ライブ授業前に配布するプリント



③ 講師による解説（各2～3分）

講師は1問ごとに受講者の解答を確認し、最も効率的な解き方を説明する。「この解法は高校入試でもよく出るので、しっかり身に付けてください」「かなり難度の高い問題でしたが、よく頑張りましたね」というようなコメントをした上で、正解者の名前を発表する

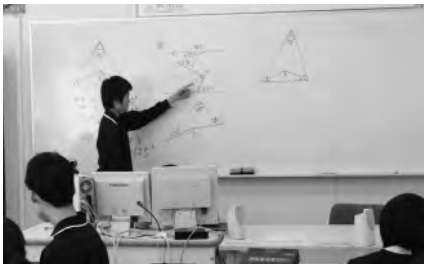
④ 教師による補足説明（約7～8分）

「ライブ授業」は30分と時間が短く、講師は一つの解き方しか紹介できない。「ライブ授業」後に補足説明の時間を設け、通常授業での解き方の違いを説明する



⑥ 生徒による解答の発表と教師の解説（約5分）

生徒がホワイトボードに解き方と解答を書いて発表、教師が解説する



⑤ 問題演習（約7～8分）

教師の補足説明後、新たにプリントを配布する。複数の解き方がある問題2～3問を教師が指定して解かせる。残りの問題は宿題とする

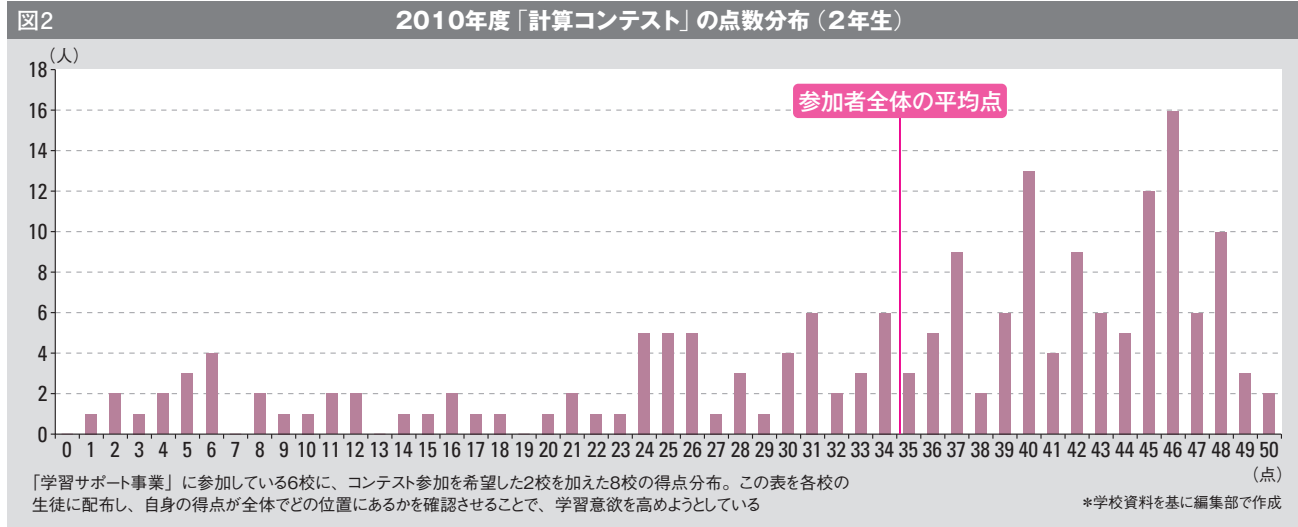


教科担任による授業（20分）

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



を次のように説明する。

「通常授業で一度学んだ内容をプリントと『ライブ授業』で繰り返し復習させることで、知識の定着を図っています。他校生に負けたくないという思いもあり、ほとんどの生徒がプリントを解いてきます。正解して講師から名前を呼ばれることで、生徒の意欲は高まるようです。授業+プリント+『ライブ授業』が、家庭学習意欲を高め、授業内容の理解を深める良いサイクルになっていると思います」

「ライブ授業」の他にも、学校同士をテレビ会議システムでつないだ「交流授業」を、英語と数学で年数回実施している。他校生が学ぶ姿が映し出されるため、生徒には良い刺激になっているという。

◎ 通常授業での工夫 多角的に検討する面白さが 家庭学習の習慣化につながる

同校では「ライブ授業」後に20分間を使い、教師が必ず補足説明を行い、通常授業で扱った解き方と講師の解き方の違いを解説している。通常授業と「ライブ授業」を関連付けることで、生徒の学習意欲を更に高めるためだ。次に複数の解き方がある問題を2〜3問出題し、解き方と解答を生徒に発表させている。複数の考え方に触れさせ、一つの問題を多角的に検討させることによって、最も効率的な解き方はどれか、問題に応じて判断する力の

育成を目指している。

「通常授業では、生徒が自力で解き方を工夫できるよう、考える時間を多く設け、その上で、生徒同士で解き方を相談させることもあります。相談するためには、まず自分の考えを持たなければなりません。自分なりの解答があるからこそ、友だちの解き方を見て、正解を導く方法は一つではないことに気付くのです」（小林先生）

◎ 6校合同の学習コンテスト 「得点できた」という達成感が 更なる意欲につながる

「学習サポート事業」では、6校合同の「英語彙力コンテスト」「計算コンテスト」を、2学期と3学期に実施している。長期休業中の自由課題として配布する練習問題を6校の教師が話し合って作り、その類題を学習コンテストで出題する。

「練習問題にきちんと取り組んでおけば、学習コンテストで高得点が取れるように作問しているため、生徒は『やったら出来た』という達成感を得られます。他校へのライブ意識もあり、ほとんどの生徒が長期休業後も、家庭で自主的に練習問題を繰り返し解いています」（小林先生）

成績は各校で共有し（図2）、校内平均点の上位3校を各校で発表する。渡部校長は、学校同士の競争意識が高まり、生徒は家庭学

図3 2009年度 学習意識・実態調査の結果

	学びの基礎力																社会的実践力					
	豊かな基礎体験	学びに向かう力						自ら学ぶ力				学びを律する力						問題解決力	社会参画力	豊かな心	自己成長力	
		感じ取る力	学習動機	自己効力感	自己責任	学習スキル	学習定着のための方略	学習計画力	自宅学習習慣	学習継続力	学習のけじめ	学習環境の整備	授業を受ける姿勢									
全国中学3年	61.7	63.8	71.8	67.7	75.8	68.1	77.6	52.6	55.2	48.7	52.0	55.9	59.3	47.8	49.6	60.8	72.3	54.9	51.4	51.9	59.2	57.8
檜沢中3年	73.0	73.7	83.1	82.6	85.4	80.6	84.4	67.3	69.4	63.5	66.0	71.5	67.6	54.2	59.4	76.0	76.4	67.9	66.7	62.5	71.9	70.8

全国と比較して5ポイント以上上回っている項目
 全国と比較して10ポイント以上上回っている項目

*民間が実施した全国調査。数値はそれぞれの項目の肯定率（100%換算）を示す

*学校資料を基に編集部で作成

習に意欲的になると話す。

「自分の成績が全体の平均点や目標点より低いと、『次の学習コンテストではもっと練習問題に取り組もう』と考えるようです。更

にどの生徒にも、個人戦ではなく団体戦として学習コンテストに取り組んでいるという意識が芽生えます。学力下位層の生徒も『友だちと一緒に頑張ろう』『やればできる』と机に向かうようになっていきます」

成果、今後の課題

小テストのこまめな実施で学習習慣を定着させたい

檜沢中学校の取り組みの成果は、09年度、民間主催の学習意識・実態調査結果（図3）に表れている。22項目すべてで全国平均以上となり、「学習スキル」「学習定着のための方略」「学習計画力」「自宅学習習慣」など15項目で平均を10ポイント以上上回った。

生徒の様子の変化としては、授業中、生徒同士が積極的に意見を交換するようになり、発言の回数が増えた。また、同校では月2回の全校集会で、生徒が委員会活動等を報告する時間を設けているが、自分がどのような場面でもやりがいや大変さなどを感じるかを、相手に分かりやすいように表現できる生徒が多くなっているという。

渡部校長は、課題の改善によって学習意欲

を更に高めたいと話す。

「日常の授業の中でも、課題の内容を工夫して意欲をより高めていきたいと思っています。例えば、ふるさとの山々の標高と気温の関係など、生徒に身近な題材を課題に取り入れるというような工夫です。また、既習事項を活用しながら『あっ』と驚くような意外な結果になる問題を工夫するなど、生徒に学ぶ喜びを感じさせ、考える力を高めることを更に心掛けていきます」

もっとも、学力下位層には学習意欲がなかなか向上しない生徒も見られるという。そのため同校では、通信添削教材を使って基礎問題の練習をする朝学習の時間にマンツーマンで指導し、諦めずに努力を続けるよう励ましている。上位層の生徒が教える姿も見られるという。また、毎週決まった曜日の放課後に個別指導をしており、こうした取り組みも家庭学習習慣の定着と意欲の向上につながっているようだ。

渡部校長は、今後について次のように話す。「他校に対する良い意味での競争意識を学習に結び付けられるよう、テレビ会議システムを使った双方向の授業を充実させたいと思います。通常授業では、前回の内容を確認する小テストの導入などにより、授業中に知識を定着させる機会をこまめに設け、生徒に前回の復習に取り組ませることで、家庭学習の充実につなげたいと考えています」

意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

他校との連携は生徒の学習意欲も教師の指導力も共に向上させる



芳賀 淳
Haga Atsushi
福島県教育庁南会津教育事務所
学校教育課 指導主事

◎取り入れたい考え方 他校生への競争心と 問題を解く楽しさを融合

本県が「学習サポート事業」を導入した背景には、小規模校では生徒同士の競争意識が希薄だったことがあります。そこで、複数の小規模校の連携によって大きな集団をつくり、その中で育んだ生徒同士の競争意識を、学習意欲につなげようと考えたのです。

他校生の様子や成績を知ると、「他校生の方が自分より上だ」と感じたり、「もつと良い成績を取ろう」と学習に意欲を見せたりします。それを後押しするため、「ライブ授業」で扱う問題や「英語語彙力コンテスト」「計算コンテスト」の練習問題をプリントにして事前に配布します。プリントに取り組めば、「ライブ授業」や学習コンテストで確実に問題が解けるように工夫しているのです。

その成果は、生徒の意識調査の結果を見ても明らかです。「学習サポート事業」に参加する6校の家庭学習時間は、いずれの学校も県平均を上回っていました。中でも檜沢中学校の生徒は、最も意欲的に家庭学習に取り組むようになっていました。

同校では普段の授業で、生徒が考え、意見を発表する時間を増やし、多様な考え方に触れる機会をたくさん設けています。自分で解き方を工夫し、友だちの意見を聞いて修正・改善する姿勢を持たせようとしているのです。宿題にも、複数の解き方が出来る問題や生徒にとって身近な題材を扱った問題を出し、学習意欲を高める工夫をしています。問題を解く楽しさや「やれば出来る」という実感と、他校に対する競争意識がセットになっているからこそ、家庭学習の時間も取り組む姿勢も大きく改善されたのだと思います。

◎他校と交流する意義 共同の作問会を通して 教師の指導力も向上

「ライブ授業」は民間企業と提携した取り

組みですが、扱う問題は6校の教師が協議して作成します。他校の教師との交流は、校内に同じ教科の担当者が少ない小規模校の教師にとって、授業づくりの工夫や課題を共有する貴重な研修の機会です。また、各校は朝学習や宿題で通信添削教材を使用していますが、こうした教材に触れることも教師にとって大きなメリットがあると思います。生徒の興味を引き付ける問題を出したり、分かりやすく解説したりする参考になるからです。「このような解説の仕方もあったのか」と、気付けられることもあるようです。外部のシステムや教材の活用により、教師も刺激を受け、指導力向上につながっていると思います。

生徒に競争意識を持たせるためにも、教師の指導力を伸ばすためにも、交流する学校は多い方が良く考えています。学習コンテストの参加校は「学習サポート事業」の6校以外にも広がり、現在は管内の9校すべてが参加しています。今後も他校との双方向授業を一層充実させ、地域全体の取り組みへと発展させていきたいと思っています。

家庭学習習慣化の取り組みは継続が大切です。他の中山間地でもICTの活用によって、小規模校同士が連携した指導は可能だと考えます。ほとんどの学校にあるコンピュータ教室やインターネット設備を生かし、指導を少しだけ工夫すれば、生徒同士が刺激し合う授業は実現できるはずですよ。